

令和3年度道北タンチョウ報告会

2022年2月23日(水) 14:00-16:30

サロベツ湿原センター 天塩郡豊富町上サロベツ 8662

主催 NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク

協力 NPO 法人タンチョウ保護研究グループ 日本野鳥の会道北支部

開会

14:00 挨拶・趣旨説明

14:05-14:35 (+質疑応答5分)

『道北に生息するタンチョウの遺伝的背景:大陸由来タンチョウと北海道タンチョウの交雑可能性』

寺岡宏樹(酪農学園大学獣医学群) オンライン

14:40-15:10 (+質疑応答5分)

『北海道におけるタンチョウ分布の現状と今後の展望』

百瀬邦和(NPO 法人タンチョウ保護研究グループ) オンライン

15:15-15:45 (+質疑応答5分)

『サロベツ周辺のタンチョウの繁殖状況と渡り調査』

長谷部真(NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク)

15:50-15:55 休憩

15:55-16:30 対談 『道北のタンチョウのこれから』

対談者: 百瀬邦和、寺岡宏樹 コーディネーター: 長谷部真

講演要旨

道北に生息するタンチョウの遺伝的背景：
大陸由来タンチョウと北海道タンチョウの交雑可能性

酪農学園大学獣医学群・NPO 法人タンチョウ保護研究グループ

寺岡 宏樹

タンチョウはアムール川流域で営巣し、中国南東岸や朝鮮半島の非武装地帯で越冬する大陸集団と、ほぼ北海道東部（釧路、根室、十勝）に留鳥として局在する北海道集団に分かれて生息している。かつて道央や東北にも繁殖地を構え、本州で越冬していたタンチョウも、開発などで明治時代に個体数が激減した。一時は絶滅したと考えられていたタンチョウが、推定 50 羽ほどから環境省などが出資する人工給餌により 1,900 羽を越えるまで回復した。そのため、北海道集団の遺伝的多様性は極めて低い。

ミトコンドリアは細胞核とは別に自前のゲノムを持ち、酸素呼吸に必要な蛋白質を合成する。しかし、過激な受精時の運動で傷害された精子のミトコンドリアは、卵子に入った後に分解されるため、母親由来のミトコンドリアゲノムだけが子に遺伝する（母性遺伝）。ミトコンドリアゲノムの中でも特に D-loop と呼ばれる蛋白質に翻訳されない部分は酸素呼吸由来の活性酸素の攻撃を受けて高確率で変異するため、遺伝的背景を調べるのによく利用される。ミトコンドリアゲノムの遺伝子型はハプロタイプ（半数体の遺伝子型）とよばれる。

北海道集団のハプロタイプはわずか 3 種（Gj1、Gj2、Gj13）に限られる。このうち、Gj13 はわずか 2 例にすぎず、2007 年以降は確認されていない。2000 年代はじめに、網走およびサロベツ湿原を含む道北域に、2010 年代には鶴川や長沼などの道央域でそれぞれ営巣が認められた。最近、道東では Gj1 型の割合が減少しているが、これまでサロベツ原野とクッチャロ湖畔で得られた羽から Gj1 は確認されていない。

2018 年に NPO・サロベツエコネットワークの長谷部氏がサロベツ原野のペンケ沼北に位置する瞳沼南岸で、未授精卵 1 つが残るタンチョウの巣に偶然でくわし、4 枚の羽を拾得した。雌は Gj2 型で、雄は Gj5 型であった。北海道を除いて国内で飼育されているほとんどのタンチョウは大陸由来とされており、Gj3-Gj9 の 8 ハプロタイプが確認されている。種の保存法から希少種であるタンチョウの試料を輸入することが難しいが、我々は、2009-2015 年に韓国北部で拾得された 7 枚の羽をソウルで調べたところ、4 つの新型とともに 2 例の Gj5 を確認した。したがって、瞳沼のつがいの雄は大陸由来と考えられる。また、巣や卵があったことから、北海道と大陸由来のタンチョウが交雑した可能性がある。遺伝的多様性が低いことから悪性伝染病などによるタンチョウの絶滅が危惧されてきたが、もし、彼らの子孫が増えていけば、北海道集団の遺伝的多様性の改善につながるのではないかと期待している。

1) Kawasaki et al. 2022. *J Vet Med Sci.* **84**, 233-237.

2) 「タンチョウ、国内未確認の個体群繁殖か 北海道で」 日経新聞電子版 2021.12.30

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUE2932B0Z21C21A2000000/>

北海道におけるタンチョウ分布の現状と今後の展望

N P O 法人タンチョウ保護研究グループ

百瀬邦和

タンチョウ保護研究グループは毎年厳冬期に全道でのタンチョウ総数調査を行なっています。その結果、昨年は確認できた最低数として過去最多の 1900 羽を記録しました。しかし、最近5年間のカウント数は 1600 から 1900 羽の間を上下しており、過去 50 年以上にわたって続いてきた増加傾向は概ね止まったように感じています。一方、繁殖地の広がりは依然進んでいます。1985 年に私たちが確認した繁殖つがいは十勝・釧路・根室地方に限られ、その数も 101 に過ぎませんでした。1999 年からはオホーツク地方での継続した繁殖が確認されるようになり、道北での繁殖は5年後の 2004 年にサロベツ湿原で始まりました。全道を対象とした繁殖状況の調査は 2015 年を最後に実現していませんが、同年にはオホーツク地方で 6 つがいが、道北地域で 6 つがいが確認されています。道北のその後の様子についてはサロベツ・エコネットワークが情報を集めているので、継続した状況把握に期待しています。日高地方を含む道央では 2012 年から繁殖が始まりました。道央では現在は 5～6 つがいの繁殖が確認されており、さらに道南へ、そして本州の東北地方へと分布が拡大していくための起点としての位置付けに注目しています。

一方で、北海道東部に隣接する国後島では 1979 年に始めてタンチョウが繁殖していることが確認されました。その後の記録は断続的でしたが、最新の情報では国後島のほか歯舞諸島の島々を合わせて 7 つがいの繁殖とそれ以外にも繁殖未確認のつがいの存在が報告されています。これらのタンチョウは釧路・根室地方から海を渡って分布を広げたと考えられており、実際に根室で足輪を付けた個体が複数羽、国後島で確認されています。道北の宗谷岬から僅か 42km 北には北海道並みの広さを持つサハリン島があります。道北の繁殖地で育った若いタンチョウがサハリンまで分布を広げるようになれば、私たちのタンチョウ保護活動にとって新しい成果となるでしょう。

サロベツ周辺のタンチョウの繁殖状況と渡り調査

NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク

長谷部真

タンチョウの繁殖地は明治時代以降道東地方に限られていたが、宗谷地方では 2002 年にサロベツで初めてタンチョウの越夏が、2004 年には繁殖が確認された。その後、浜頓別町で 2008 年、猿払村で 2009 年、稚内市で 2015 年、枝幸町で 2019 年に繁殖が確認された。道北地方では春にタンチョウが道東地方より飛来し、春から夏にかけて繁殖し、秋にデントコーン畑や牧草地に現れ、初冬に道東地方に向かう渡りを行うとみられている。

私たちは 2021 年に環境省事業および経団連自然保護基金の助成事業を利用して、ドローンを用いたタンチョウの繁殖状況調査、目視による個体数調査を行い、鳥類関係者から情報収集を行った。その結果、サロベツで 8 つがい、稚内市で 1 つがい(大沼バードハウス私信)、猿払村で 3 つがい(小俣孝範氏私信)、浜頓別町で 2 つがい(小西敢氏私信)、枝幸町で 1 つがい(村山良子氏私信)の合計 15 つがいを確認した。サロベツでは 8 つがいのうち、3 つがいから幼鳥がそれぞれ 1 羽が確認された。秋には 16 羽が確認されたが、過去数年のように 1 箇所への集結は確認されなかった。稚内市と猿払村のつがいから幼鳥は確認されなかった。浜頓別町では 2 つがいのうち、1 つがいから幼鳥 1 羽が確認され、枝幸町では 1 つがいから幼鳥 1 羽が確認されたため、全体で 5 羽の幼鳥が確認された。

秋に経団連自然保護基金と環境省のタンチョウ保護増殖事業の一環として、豊富町で成鳥 2 羽、亜成鳥 1 羽、幼鳥 1 羽を捕獲し、成鳥 1 羽には発信機および足環を、残り 3 羽には足環を装着した。2021 年 10 月 30 日に発信機を装着した成鳥は 11 月 30 日に豊富町を出発した後、12 月 24 日まで浜頓別町に滞在し、2 泊 3 日で鶴居村に到達した。11 月 22 日に足環を装着した亜成鳥は 12 月 1 日まで豊富に滞在した後、12 月 4 日に鶴居村で再確認された。現地の方々の協力によりこれらの 2 羽は現在も鶴居村で確認されている。これらの標識・発信機個体の観察・発信機の追跡により今後道北地方への渡りや繁殖状況が明らかになるが期待される。2022 年度も繁殖調査や発信器や足環を装着する事業を継続することにより、渡りや繁殖状況調査を明らかにしたい。

サロベツ湿原センターではタンチョウを広く普及啓発するためのステッカーを制作した。今後はポスターやパンフレットを作成することにより、サロベツ周辺で繁殖するタンチョウの重要性を広く周知したい。